

CUC公開講座2024【第6回】
遠藤隆吉研究所「遠藤隆吉と水戸学」
【講演2】

「商業教育と実学」

～福澤諭吉を手掛かりに現代ビジネスを考える～
2024年9月6日

千葉商科大学
石井泰幸

2024/9/6



本日の報告について

1. はじめに
2. 実学の背景 1（論語）
3. 実学の背景 2（プラトン哲学）
4. 実学とはなにか
5. 実学教育の核心
6. 終わりに

2024/9/6



1-1. はじめに

- ・講演 1 では、遠藤隆吉の「建学の趣旨」についてすでに確認されたが、遠藤は次のような問題意識を持っていた。

「今日商業道德の頹廃は頗る寒心すべきものあり。外国貿易の不振も畢竟此处より来る。故に実業家となるべき者に商業道德を吹き込み殊に武士的精神を注入するは最も急務なりと謂わざるべからず。」

- ・つまり、遠藤が治道家の精神をもって実現したかったことは商業道德により正常な市場経済を実現しようとするものであり、そのために治道家を目指す武士的精神を涵養させていくことを求めたのである。

- ・商業が織りなす世界は、人と人との交流を実現し、国や民族を超えて相手を信頼し約束を守っていくものだからである。

2024/9/6

3

1-2. はじめに

- ・本講演では、遠藤が商業道德に求めたものを実学教育に注目した福澤諭吉からひも解いていきたい。

- ・福澤の実学教育の背後にある哲学的思考は、プラグマティズムとアダム・スミスによる考えを基礎としている。

- ・ここでは、現代ビジネスの在り方を渋沢栄一思想と対比させながら論及を試みたい。

- ・実際、遠藤は大正・昭和初期における商業道德の退廃を嘆いたが、その問題意識は福澤と渋沢が懸念したことでもあり、それは現在もなお現代のビジネス界にとっても大きな問題となっている。

- ・以上を踏まえ、本講演では福澤の持つ実学の可能性について論じていく。

2024/9/6

4

2-1. 実学の背景 1（論語）



福澤諭吉（1835～1901）

- ・ 豊前（現大分県）中津藩の下級武士の次男として大坂に生まれる。
- ・ 緒方洪庵の適塾で蘭学を修めたが、横浜でオランダ語が全く通じないことに衝撃を受け、独学で英語を勉強する。
- ・ 幕府の遣欧米使節に3度参加し、『西洋事情』などの著作を通じて日本に欧米文化を紹介した。
- ・ 33歳で慶應義塾を開設する。
- ・ 『学問のすゝめ』、『文明論之概略』など著書多数。

2024/9/6

5

2-2. 実学の背景 1（論語）

- ・ 実学をここで問う前に福澤の論語についての基本的な考え方に目を向けてみたい。
- ・ 福澤は『学問のすゝめ』13編において孔子の教えとしての『論語』を批判している。
- ・ 特に孔子が真の聖人で遠い後世を鋭く考察できる見識があったなら、権威で束縛する道に満足するはずがなかったはずだ。
- ・ つまり、後世に孔子を学ぶものはその時代の考え方を考慮に入れて取捨選択する必要があるということだ。
- ・ このように福澤は2500年前の教えをそのまま現代に適用しようとする者に物事の価値や評価を語る資格がないと批判している。
- ・ 実際、当時の『論語』の解釈は南宋の時代に朱熹により確立された朱子学に基づくものであった。

2024/9/6

6

2-3. 実学の背景 1（論語）

- ・朱子学は孔子が亡くなり約1600年後に確立された儒教の考え方であり、そこには格物致知（かくぶつちち）といった物の理を突き詰めてそれに到達すれば知を完成させることができると説かれていた。
- ・そのためには、情や欲を抑え込み（居敬：きょけい）、気を秩序付けている物事の理を極め（窮理：きゅうり）、天の理を体得する必要がある。
- ・朱子学では、万物が「理」と「気」という二つの原理から構成されているとされる。「理」はすべてのものや道德の根拠となっており、「気」は具体的なものの存在や要素を指す。「気」は変化を引き起こすものであるが、「理」が働いて秩序を与えることで、万物が成り立つと考えられてきた。
- ・そして、朱子学は人間の心の本性が天から授けられた理そのものとし、性即理と説いた。

2024/9/6

7

2-4. 実学の背景 1（論語）

- ・ここで重要な点は、この性即理が人間の心には理が生まれながらに備わっており（本然の性）、それが仁、義、礼、知の四徳に加え、信の五常に具体化されるとした。
- ・しかし、ひとたび人が物質的要素である気にふれると情や欲が発生し、人の心は霧に覆われてしまう（氣質の性）ので、常に心を本然の性に戻す努力が必要である、と朱熹は説いたのである。
- ・したがって、格物致知はその本然の性に戻す努力の在り方を示したのである。
- ・しかし、このような情と欲の考え方を否定する朱子学を福澤は受け入れることができなかった。
- ・実際、福澤以前においても、このような朱子学の考え方に対し、江戸の陽明学派や古学派、さらには国学の思想が対峙していた。
- ・この思想の流れについてプラトン哲学と比較しながら考えてみたい。

2024/9/6

8

3-1. 実学の背景2（プラトン哲学）

- ・プラトン哲学は約2400年前、ソクラテスの弟子であったプラトンによって確立されたものである。その骨格は、プラトン以前のギリシャ哲学が自然に対して原因と原理を追究する知識の技法に加え、生の原理を結びつけるものであった。

- ・そこでは、異なる人々が対話により共通了解や共感を見出しうるものとされ、その哲学の中核にはイデア論が据えられた。

- ・しかし、このイデア論はモラル論を確立する一方で、プラトンはエロス論といった人間の生を肯定し、幸福を獲得するいわば欲望を肯定していく哲学を展開した。

- ・つまり、プラトンは人間が持つモラルとエロスとの連関を通じ、躍動する哲学を確立したのである。

- ・しかし、プラトンが亡くなってから600年後、プロティノスは、このプラトン哲学の欲望の審級を「根源的存在」と書き換えてしまった。

2024/9/6

9

3-2. 実学の背景2（プラトン哲学）

- ・プラティノスによってこのようにプラトン哲学は新プラトン主義へと変奏されていく。

- ・ここからわかることは、孔子が亡くなって1600年後に朱熹が儒教を朱子学と書き換えたことで、情と欲が否定されることになったのと同じように、プラトン哲学も、プラティノスによって新プラトン主義がエロス論を捨象し、欲望そのものが否定されることになった。

- ・この朱子学と新プラトン主義は国家を安定させる意味で極めて有効に機能し、朱熹が生きた南宋も国家的にも政治的にも安定することになった。また徳川家康もこの朱子学を導入することで江戸幕府の安定化を図った。

- ・同様にローマ帝国も新プラトン主義とキリスト教を導入することで国家の安定を築くことができ、西洋と東洋問わず、哲学の躍動性は国家の安定化のために失われてしまった。

2024/9/6

10

3-3. 実学の背景2（プラトン哲学）

- ・ここで重要なポイントは、『論語』もプラトン哲学もなぜ人間の自然の理である情や欲望を排除しなければならなかったのか、この一点に尽きる。つまり、欲望を持つということ自体が罪か、ということである。
- ・私たちは生を受けた瞬間から両親の期待に応えようと常に名誉や地位、富を求めることに終始する。
- ・それが家族の幸せであるならば、それを悪と置くことに疑問を感じる人はいないであろう。
- ・プラトン哲学の『国家』においては二つのスフィンクスを乗り越えていくことを提示している。
- ・それは自己中心性（利己）と徳福一致（利他）との連関である。
- ・これは利己と利他の対立関係を乗り越えていくことであり、それは渋沢栄一の『論語と算盤』の中で、論語は富貴を否定してはいない、という主張に通じる。

2024/9/6



4-1. 実学とはなにか

- ・その意味で福澤は全面的に『論語』を否定していたわけではない（以下、城島（2010、186頁以下）による）。
- ・1898年（明治31年）に「時事新報」に連載した論説において「排外思想と儒教主義」の中で「儒教主義の害はその腐敗にあり」としており、その理由を翌年刊行された『福翁自伝』で述べている。
- ・「それは私は漢学に不信仰で漢学に重きを置かない。それは腐儒の腐説を一掃してやろうと若い時から心がけたからだ。私はよく漢学が分かるので、洋学者の批判とは違う。」
- ・福澤の腐儒こそが朱子学であり、士農工商の名分論の基礎となったと考えた。というのも、商人は物品を右から左に流し暴利をむさぼる卑しい輩とし、道徳がない存在であると朱子学によって位置付けられたからである。
- ・渋沢も『論語と算盤』で自分の経験から経済と道徳を一致させるために常に論語と算盤が肝要だとし、論語と富貴は甚だ近いものであると説いた。

2024/9/6



4-2. 実学とはなにか

- ・そこで改めて実学の概念の根幹を福澤諭吉の思想的課題から考えてみたい（以下、福澤の思想解釈については、生越（2010）に基づく）。
- ・福澤は「独立自尊」を掲げたが、これは旧来の価値観から脱却し、自由な個人が新たな価値観を形成し文明社会を確立するものであった。
- ・そこには「公智公德」を備えた市民が文明国の担い手になるという主張が象徴的に込められている。
- ・そしてこの独立自尊の概念の中核には「経済的自立」が存在し、この独立とは「他人の財に依らざる独立」「有形の独立」「自労自活」を基盤とし、これが実現されて初めて「無形の独立」が可能となり、対等の社会関係が成立するのである。
- ・その意味で知的道徳的発達を推進し、自主独立を実現するために、福澤が強調したことは学問の普及である。さらにそれは哲学的思弁に終始する「虚学」ではなく、日常生活に必要な実践的知識を備えた「実学」でなければならないと述べている。

2024/9/6

13

4-3. 実学とは何か

- ・つまり、実学を学ぶということは科学的原理を解明し、現実世界に適応する実践的批判的精神を基盤とし、「自由な個人の自己意識の形成」を養うことなのである。
- ・したがって、本学の建学の精神において遠藤隆吉が問題の所在として捉えた実学教育こそ商業道徳を涵養することにつながるのである。
- ・では、ここで、福澤諭吉の実学について確認してみたい。
- ・福澤は『学問のすすめ』の初編において、実学を「人間普通日用に近き実学なり」と説明しており、実なき学問は後で学ぶものだ述べている。そして、実学の種類を「手紙の言葉、簿記、算盤、計量、地理学、物理学、歴史学、経済学、倫理学」とした。
- ・実生活も、実際の経済も学問、そして、現実の世の中の流れを察知するのも学問であり、和漢洋の本を読むだけが学問ではない。また、自らの才能や人間性を高め、政府と同等の地位に上ることであると述べている。

2024/9/6

14

5-1. 実学教育の核心

- ・ここで改めて、福澤のこのような思想の原点を概観してみたい。
- ・福澤は『文明論之概略』の巻之六において、文明化の目的を日本の独立に定め、西洋の諸概念・諸制度を日本の独立にとって有用か否かという観点から論じた。
- ・その際、福澤は西洋的なものを絶対視することは決してしなかった。
- ・その一方で、福澤は西洋文明を盲信するわが国の学者に対しては厳しい批判を加えたのである。
- ・つまり福澤の思考の基盤にはプラグマティズム的視点があったため、日本において西洋の諸制度が日本に適するかを重視したのである。
- ・そもそもプラグマティズムとは、ある理論が実践に照らして役に立つか否かという基準からその理論の真理性を明らかにしようとする考え方である。

2024/9/6

15

5-2. 実学教育の核心

- ・プラグマティズムは、実用主義、実際主義、行為主義と訳され、その思想は、チャールズ・サンダース・パース、ウィリアム・ジェームズとジョン・デューイらによって完成された。
- ・つまり、福澤は実学を江戸から明治に展開する社会にプラグマティズム的に必要な考え方と定位したのである。
- ・実際、福澤は文明化の目的を日本の独立に定めたが、これは福澤が文明化を西洋化と混同しなかったことを意味している。確かに明治5年の学制や明治11年の教育令は森有礼が西洋を手本にしたものであった。
- ・しかし、福澤はこのような西洋に準じた諸概念や諸制度を日本の独立にとって意味あるものか否かといった視点で論じていった。

2024/9/6

16

5-3. 実学教育の核心

- ・そこで、福澤が重視した和魂洋才の思想が確立されたのである。
- ・この和魂洋才こそ全国各地の伝統ある商業高校において精神的支柱として掲げられたものと私たちは見ることができる。
- ・それは、実学の本質である明治時代の土農工商を乗り越えるものであった。実際土農工商は儒教的な名分論であって、実学の本質は『学問のすすめ』の冒頭にあるように「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」というものである。
- ・しかし、実のところ福澤はこの実現が難しいがゆえに土農工商を乗り越える実学を学ぶべきだと強調した。
- ・ならば福澤は何を実学教育の中で目指せといったのであろうか。
- ・それは先に述べた独立自尊であり、一身独立した個人である。そしてその個人が人間関係を構築し、その関係性を深めていけば国が栄えるというのである。それを福澤は人間交際（じんかんこうさい）と呼んだ。

2024/9/6

17

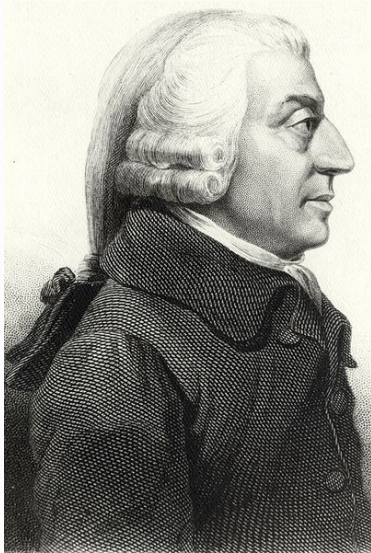
5-4. 実学教育の核心

- ・和魂洋才が実学教育の基本となり土農工商を乗り越えるといった意味をここで改めて確認してみたい。
- ・それは商売の原則は自由市場であるということであり、自由市場においては身分の上下があってはならないということである。
- ・つまり、福澤は、当時の日本が海外との自由貿易を実現するならばまず国内の市場の目線を平等におくべきだというのである。
- ・これは福澤が先に述べたアダム・スミスの経済学の考え方を理解していたと考えられ、その意味で、アダム・スミスが持つ自由放任の考え方が『学問のすすめ』に通底する。
- ・その自由放任を実現するには、土農工商といった身分制度から脱却しなければならないことを意味し、それこそが旧来の価値観からの脱却を目指す独立自尊の思想そのものである。

2024/9/6

18

5-5. 実学教育の核心



アダム・スミス (1723~1790)

- スコットランド、エディンバラ対岸の港町カーコールディに税関吏の次男に生まれる。
- 14歳でグラスゴー大学に入学し、道徳哲学教授ハチスンの影響を受ける。
- 無神論を説いたとして禁書だった『人間本性論』を読み、著者ヒュームを友人とする。
- グラスゴー大学で論理学教授、道徳哲学教授を務める。
- 著書『道徳感情論』、『国富論』など。

2024/9/6

19

6-1. 終わりに

- 本講演においては、商業教育における実学の可能性について福澤諭吉を手掛かりに論及した。
- 実際、遠藤隆吉が問題意識とした商業道徳の退廃が現在もなお様々な局面において噴出する今、この福澤諭吉の実学教育の在り方はさびることはない。
- しかしながら、ここで論じたように商業道徳を絶対化することは一方で朱子学や新プラトン主義が陥った経済の可能性を封じ込めることにつながってしまう。
- だからこそ、福澤の思想的変遷をこれまで確認してきたのである。
- 福澤は『学問のすすめ』を書く中で、蒙昧な大衆を教育・指導する知識人層の役割を重視した。
- これは福澤が当初から抱いていたエリート主義であった。
- そしてそれにより、中産階級（ミヅルクラッセ）を中心とする文明社会が成立すると明言したのである。

2024/9/6

20

6-2. 終わりに

- そして『学問のすすめ』で大衆への働きかけに限界を感じ、『文明論の概略』において士族以上の者を知者とし、政治的指導者として「農商以下被治者の種族」と区分し、農商庶民に厳しい見方を明らかにした。
- これは当時の社会背景もあるが、江戸から明治にかけての激動する時代背景を物語っている。
- つまり、福澤にとって開国した日本の行く末は実学教育の広がりにより商業による経済を活性化させることであり、だからこそ、渋沢栄一だけでなく、士族である岩崎弥太郎に福澤は大きな期待を寄せたのである。
- まさにそこに『学問のすすめ』で宣言した「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」については後世に託したのではないか。
- その意味で福澤の目指した問題意識の解決はまさに遠藤隆吉の実学教育へと手渡されていったのであった。

2024/9/6

21

参考文献

- 生越利昭「明治啓蒙における経済思想—福澤諭吉を中心に—」経済学史学会『大会報告集第74回全国大会』2010年、26-30頁
- 生越利昭「福澤諭吉の『自由』と『個人主義』—西欧文明の導入と転位—」神戸商科大学『人文論集』第39巻3・4号、2004年
- 杉山忠平『明治啓蒙期の経済思想』法政大学出版局、1986年
- 城島明彦『福澤諭吉と渋沢栄一』青春出版社、2020年
- 竹田青嗣『プラトン入門』筑摩書房、2015年
- 福澤諭吉『文明論之概略』（松沢弘陽校註）岩波書店、1995年
- 福澤諭吉『学問のすすめ』岩波書店、2008年
- ヒューム『市民の国について』（小松茂夫訳）上・下、岩波書店、1982年
- プラトン『饗宴』、岩波文庫、1973年
- プラトン『国家』、上下巻、岩波文庫、1979年
- プラトン『パイドロス』、岩波文庫、1974年
- 野間口隆郎「日本の経営の源流『合本主義』に関する考察」国際経営学論集、第2号、2023年
- 丸山真男『「文明論之概略」を読む』上・中・下、岩波書店、1986年
- 村上泰亮『反古典の政治経済学』上・下、中央公論社、1992年
- スミス『道徳感情論』（水田洋訳）筑摩書房、1973年
- スミス『国富論』（山岡洋一訳）全二冊、日本経済新聞社出版局、2007年マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（大塚久雄訳）岩波書店、1986年

2024/9/6

22

ご清聴ありがとうございました。

2024/9/6

